

横須賀市どぶ板通り商店街の利用実態調査 —米軍基地に隣接する商店街のまちづくりに向けて—

夏目祥平¹・赤坂亮輔²・白井駿太郎²・渡辺大樹²

(¹ 愛知教育大学・院, ² 愛知教育大学・学)

- | | |
|-------------------|---------|
| I はじめに | IV おわりに |
| II 対象地域の概観 | |
| III どぶ板通り商店街の利用実態 | |

キーワード：米軍基地，まちづくり，どぶ板通り商店街，神奈川県横須賀市

I はじめに

近年，日本の中心商店街は衰退傾向にある。郊外型ショッピングモールの台頭や自動車交通の利便性向上によって，多くの中心商店街がいわゆる「シャッター通り」と化してしまった。しかしその一方で，立地や地域資源などの立地特性を活かし，良好な経営を続ける商店街が存在しているのもまた事実である。なかでも，「米軍基地」に隣接するという立地特性を活かしたまちづくりを行う商店街が，日本には多数存在している。代表的なものとして，沖縄県沖縄市の嘉手納基地に隣接する「ゴザゲート通り」や，東京都多摩地域の横田基地に隣接する「福生ベースサイドストリート」などが挙げられよう。いずれの商店街も，アメリカンテイストな商店街づくりを推し進めることで観光客を呼び寄せることに成功しており，米軍基地という特異な立地特性が商店街の維持・繁栄に大きなかわりをもっているものと考えられる。

このような事例に関する先行研究では，佐藤ほか（1991）が横田基地および横須賀海軍基地周辺の商業集積地において地域住民や来街者にアンケート調査を実施し，両者の地域イメージを分析した。また松倉ほか（2011）も，米軍基地を抱える青森県三沢市の地域イメージを，同じくアンケート調査によって明らかにしている。

本研究の対象地域である横須賀市どぶ板通り商店街に着目した研究には，店舗形態の変遷を整理した柴田

ほか（2005）や，商店街を取り巻く経営環境の変化とそれへの対応や現状について調査した熊谷・後藤（2011），そして戦後から昭和後期までのどぶ板通り商店街の形成過程を考察した双木（2016）らがある。

以上を踏まえると，横須賀市どぶ板通り商店街自体の変遷や地域イメージを分析した研究はあるものの，当該商店街の来訪者に着目してその利用実態を調査したものは見当たらない。そこで本研究では，横須賀市どぶ板通り商店街の利用客を国籍で分けて分析することで，当該商店街のもつ米軍基地という立地特性を明らかにすることを目的としたい。

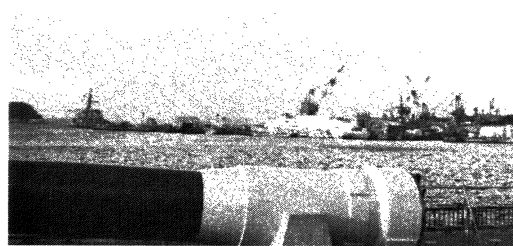
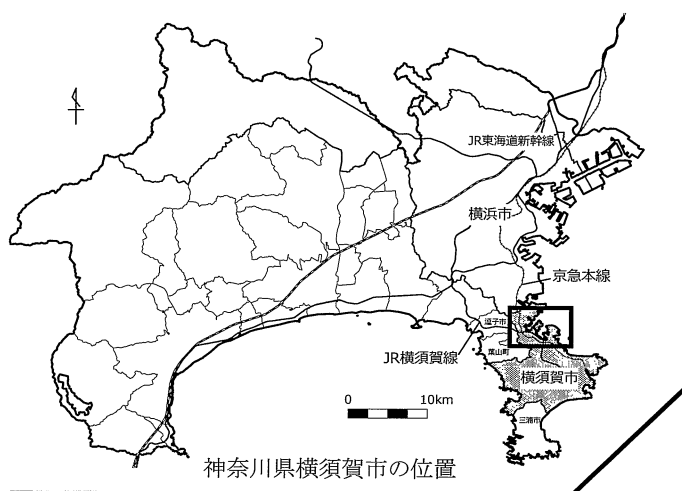
なお本研究では，まずどぶ板通り商店街振興組合（2017年3月7日）や横須賀市観光協会（2017年3月8日）に対して聞き取り調査を行って商店街の現状を把握するとともに（II），振興組合からの許可を得たうえで，実際に商店街を訪れた来訪者に利用実態のアンケート調査（2017年3月7日）を実施した（III）。

II 対象地域の概観

1. 神奈川県横須賀市の概観

横須賀市は，神奈川県南東部の三浦半島中央に位置し，面積約100 km²，人口は406,586人で世帯数は165,746世帯（2015年国勢調査）の中核都市である（図1）。神奈川県内の市町村では5番目の人口・世帯数となっている。また横須賀市の年間観光入込客数は，2015年で9,407,905人である¹⁾。

横須賀市内に立地する観光地には，どぶ板通り商店



JR 横須賀駅前の港と軍艦の見える風景
(2017年3月7日, 阿部亮吾氏撮影)



海軍カレーのある風景（どぶ板通り商店街）
(2017年3月7日, 阿部亮吾氏撮影)

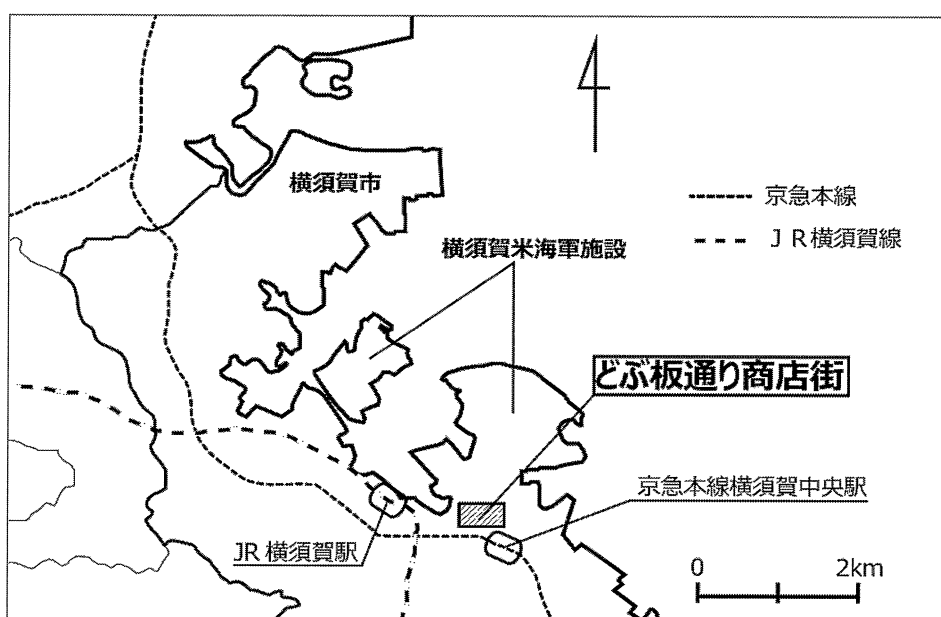


図1 対象地域の概観

街以外にも「三笠公園」（日露戦争で活躍した世界三大記念艦の1つ「三笠」が保存された公園）²⁾ や、自然・動物・海をテーマにした体験型の公園「ソレイユの丘」³⁾ などがある。東京湾に面している半島東側では「海」の観光業が盛んな一方、西側はソレイユの丘に代表される「自然」「農」の観光業が盛んである⁴⁾。

そして以下で述べるように、横須賀市を語るうえで欠かせないのが米軍関連の海軍施設であるが、これは戦後の1945年9月2日に、もともと日本の海軍（横須賀鎮守府）が使用していた施設を連合軍が接収するかたちで設置されたものである。

2. どぶ板通り商店街の概観

どぶ板通り商店街は横須賀市の中心市街地に位置し、正式名称は「本町商店街」という（図1）。「どぶ板」という名前は、この通りの中央を流れていたどぶ川を、交通の便をよくするために鉄板でふたをしたことに由

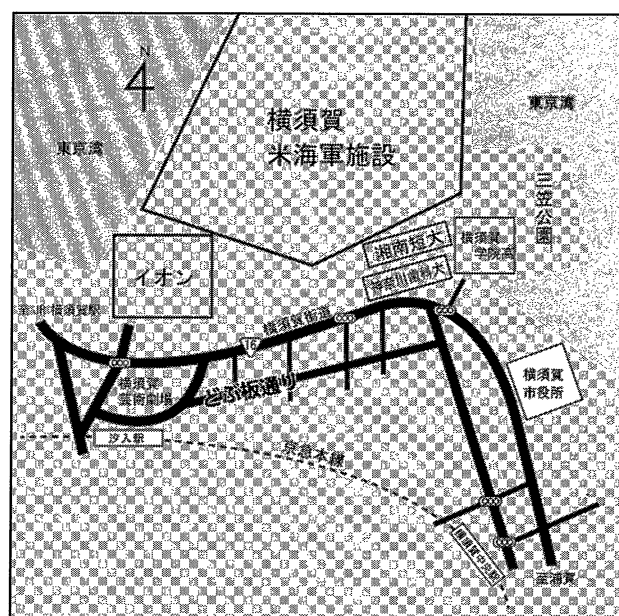


図2 どぶ板通り商店街の概観
(どぶ板通り観光パンフレット等をもとに作成)



図4 どぶ板通り商店街に設置された手形レリーフ

(2017年3月7日, 阿部亮吾氏撮影)



図3 どぶ板通り商店街のアメリカンテイストな景観

(2017年3月7日, 阿部亮吾氏撮影)

来する⁵⁾。どぶ板通り商店街は京急本線汐入駅から米海軍施設付近に至る全長約300m(図2)で、横須賀基地の正面に位置した当該商店街には、戦後まもなく米軍従事者向けのスーベニヤショップやバーが軒を連ねた。

しかしベトナム戦争の泥沼化、ドル暴落などを経て、1970年代半ばからは米兵が激減し、どぶ板通り商店街も一時衰退期を迎える。街が静まり返ってしまった

なかで、商店街の店主などで組織する横須賀市本町商店会が中心となり、米兵やその家族だけでなく、日本人をターゲットにした商店街づくりへと転換を図っていくことになった。1989年には「本町街づくり委員会」が発足し、その転換を後押しした。

また、汐入駅周辺は横須賀中央駅付近に比べ、人の往来が少なかった地区であったが、平成に入って汐入駅前に大型ショッピングセンターが完成したことにより(図2)、横須賀中央駅を利用していた人も汐入駅周辺を訪れるようになった。この影響もあって、両駅間を結ぶ数少ない道路の1つであったどぶ板通りを利用する地元の人々が増え、どぶ板通り商店街はかつての賑わいを取り戻しつつあるという。

商店街自体は、生活必需品を売る店舗というよりも米軍向けが主体であるが、一昔前にあった「日本人の近づけないイメージ」も景観を整備することで一新し、米軍基地と一体になって安心安全の維持にも努めている。そのため地域住民だけでなく、日本人観光客が夜も安心して楽しめる街となっている。近年は、観光客向けのスカジャン専門店やミリタリーショップなども人気を博しているという。まさに、日本とアメリカの文化が融合した独特な雰囲気をもった商店街である(図3, 図4)。ちなみに、日本でスカジャンの発祥地といわれているのもここ、どぶ板通り商店街である。

2016年時点で97の店舗が商店街振興組合に加盟しており、そのなかにはミリタリーショップやスーベニヤショップはもちろんのこと、飲食チェーン店やホテルなども含まれている。

3. どぶ板通り商店街のまちづくり

「日本に居ながらにして外国の雰囲気を味わえる街」⁶⁾

をアピールするどぶ板商店街は、ほかの一般的な商店街にはない昼の顔と夜の顔を併せもっている。昼間はミリタリーショップやネイビーバーガー、横須賀海軍カレー（図1）のお店が開き、日が暮れる頃になるとライブハウスやソウルバーがオープンする。

2017年7月で136回目を迎えた、どぶ板通り商店街を象徴するイベント「どぶ板バザール」は、商店街振興組合が中心となって運営企画している一大イベントである。当初は年2回の開催であったが、現在は2月・5月・7月・11月の年4回となっている。内容はフリーマーケットの出店に加え、米軍基地から屈強な参加者を招いてのアームレスリング大会など、どぶ板通り商店街独自の特色もみられる。

さらに、どぶ板通りに並ぶ店舗の多くが米ドルの支払いを歓迎しており、「東京から一番近いアメリカ」をキャッチコピーにした「ドル旅キャンペーン」を展開しているのも、地域の特性を活かしたまちづくりの好例であるといえる。2013年には、どぶ板オリジナルの「ミリメシ海軍カレー」の缶詰が開発され、人気を博している。

Ⅲ どぶ板通り商店街の利用実態

1. アンケート回答者の基本属性

本研究では、商店街利用者に対して夕方に路上でアンケート調査を行った（図5）。アンケート回答者の総数は37人であり、そのうち日本国籍者（以下、日本人）が16人、アメリカ国籍者（以下、アメリカ人）が18人、国籍不明が3人であった。アンケート調査の実施日が火曜日の夕方ということもあり、日本人の観光客は少なかった。商店街振興組合によれば、週末



図5 路上アンケート調査の様子

（2017年3月7日，阿部亮吾氏撮影）

の人口比率は日本人の方が高いという。以下では、国籍不明3人を除く計34人を分析対象に行論する（表1）。

回答者を性別でみると、日本人では女性の割合が高かった一方で、アメリカ人はほとんどが男性であるという結果が得られた。実際に、日本人男女は比較的グループで行動していたのに対し、アメリカ人は男性単独での行動が多かったように見受けられた。

次に年齢層では、日本人は大幅な偏りがみられなかったのに対し、アメリカ人は20～30代に回答者が集中した。どぶ板通り商店街の周辺にはいくつかの高校や大学が点在しており、日本人では学生と思われる10代の回答者もいたが、アメリカ人では10代はいなかった。

また、回答者の居住地は地元横須賀市内がどちらも多かったが、アメリカ人に着目すると「米軍基地」内が10人と回答者の半数以上を占めており、日本人を

表1 アンケート回答者の基本属性

国 籍	性 別	性 別		年 齢 層			居 住 地		
		(人)	(%)						
日本人 n=16	男性	7	43.8	10代	2	12.5	横須賀市内	14	87.5
	女性	9	56.3	20～30代	6	37.5	横須賀市外	2	12.5
				40～50代	5	31.3			
				60代～	2	12.5			
				不明	1	6.3			
	計	16	100.0	計	16	100.0	計	16	100.0
アメリカ人 n=18	男性	14	77.8	10代	0	0.0	横須賀市内	6	33.3
	女性	3	16.7	20～30代	13	72.2	横須賀市外	2	11.1
	不明	1	5.6	40～50代	3	16.7	米軍基地内	10	55.6
				60代～	1	5.6			
				不明	1	5.6			
	計	18	100.0	計	18	100.0	計	18	100.0

（アンケート調査より作成）

含めても全回答者の約 3 割が米兵であるという結果になった。どぶ板通り商店街の利用実態における米軍基地の存在はやはり大きく、これは一般的な日本の商店街とは全く違ったどぶ板通り商店街特有の傾向であるといえる。

以上のことから、本アンケート調査の回答者は、日本人の場合はほとんどが市内居住の地域住民で性別や年齢に大幅な偏りはなく、対するアメリカ人は基地所属の若年男性を中心に構成されていることが分かる。

2. 商店街の利用実態

横須賀市の名物である横須賀海軍カレーやネイビーバーガーなどが浸透してきていることもあってか、利用目的は両国籍とも「飲食」（日本人 8 人、アメリカ人 11 人）が最多という結果となった。ただし、「買い物」目的では日本人 1 人に対してアメリカ人 5 人と、アメリカ人の方が買い物を目的に来訪する回答者が多かった。

一方、利用頻度は日本人とアメリカ人で差がついた（図 6）。たとえば日本人は利用頻度が比較的低い一方で、アメリカ人は週に 1～2 回以上という回答者が 8 割近くを占めていた。この結果から、日本人にとっては、どぶ板通り商店街は日常的に訪れる場所というよ

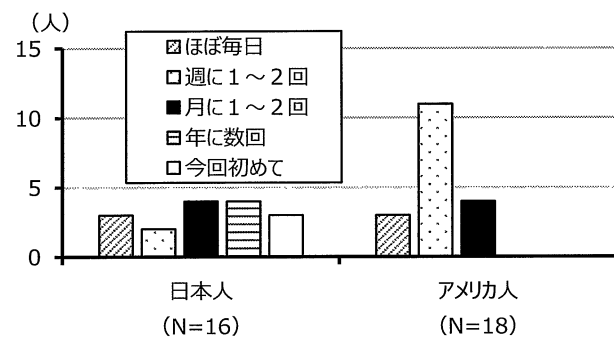


図 6 利用頻度
(アンケート調査より作成)

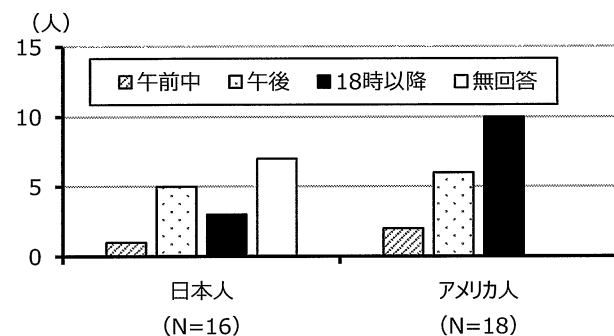


図 7 利用時間帯
(アンケート調査より作成)

りもたまに訪れて飲食などを楽しむような観光的スポットであるが、アメリカ人にとっては日常的に飲食や買い物を楽しむような、基地内居住空間の延長であると解釈される。

最後に、利用時間帯の差もみておきたい（図 7）。アメリカ人の利用時間帯には「18 時以降」という回答が多く、基地に勤務している主に若年男性が仕事を終えてから飲食を目的に来訪している姿が想像される。実際に、アメリカ人向けの飲食店やバーなどは、日中は閉まっていたとしても 17 時ごろになると開店するという店も多かった。反面、日本人の利用時間帯はどちらかといえば午後に集中しており、国籍別に利用実態の違いが浮き彫りとなった。

以上、どぶ板通り商店街では、利用者の国籍によってその利用形態（利用目的や頻度、そして時間帯）に大きな差異が生じている様子が明らかになった。すなわち、どちらも飲食を主たる目的にしている点は共通しているものの、たまに来訪する程度の日本人に対して、日常的にかつ夜間に利用するアメリカ人若年男性といった対比である。これは、米軍基地に隣接している立地特性が、変わらず当該商店街のユニークな地域資源になっていることを意味している。

IV おわりに

本研究では、米軍基地に隣接する商店街の特徴をその利用実態調査から考察した。横須賀市どぶ板通り商店街は地理的・歴史的に米海軍基地との共存が課題であり、それとどうかわりあっていくのかということが常に問われてきた。その結果、商店街振興組合を中心に米軍基地に近いという立地条件を強みとしながらも、様々なイベントを行うことで日本人観光客をも取り込めるような観光地へと舵を切ってきたのである。

その一方で、米海軍基地の居住者はかつてと変わらず日常的に商店街を利用しており、アメリカ人にも愛されるような商店街の顔も失っていない様子が、利用実態アンケート調査より明らかになった。「日本に居ながらにしてアメリカの雰囲気味わえる街」を旗印に、アメリカ人にも日本人にも受け入れられるようなまちづくりを展開している例は全国的にも珍しい。どぶ板通り商店街の事例が、衰退傾向にある商店街の取り組みとして、新たな指標となれば幸いである。

本研究の課題として、アンケート調査の実施日が平日になってしまった点が挙げられる。商店街振興組合への聞き取り調査によると、近年のどぶ板通りは、週

末になると日本人観光客が観光バスで訪れることもあるという。一方で、本研究のアンケート調査では日本人も横須賀市内居住者がほとんどであった。そのため同様のアンケート調査を週末に行えば、日本人観光客によるどぶ板通り商店街の利用実態をより詳細に把握することができただろう。また平日の夕方ということもあつてか、時間帯によっては人通りが閑散としてしまうこともあり、1日で行うアンケート調査には得られた回答者数に物足りなさを感じた。いずれも今後の課題としたい。

謝 辞

本研究の調査にあたり、ご多忙のなか聞き取り調査にご協力いただいたどぶ板通り商店街振興組合ならびに横須賀市観光協会の方々、また路上でのアンケート調査に温かく応じてくださった商店街利用者の皆様には、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 横須賀市ホームページ「横須賀市統計書」(<https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/0210/data/t-k-syo/now.html#kyouiku>)（最終閲覧日：2017年8月14日）を参照。
- 2) 横須賀集客促進実行委員会ホームページ「ここはヨコスカ」(<https://www.cocoyoko.net/>)（最終閲覧日：2017年8月11日）を参照。
- 3) ソレイユの丘ホームページ(<https://www.seibu-la.co.jp/soleil/>)（最終閲覧日：2017年8月11日）を参照。
- 4) 横須賀市観光協会に対する筆者らの聞き取り調査（2017年3月8日）による。
- 5) 横須賀本町どぶ板通り商店街ウェブサイト(<http://www.dobuita-st.com>)（最終閲覧日：2017年2月19日）を参照。
- 6) 全国商店街振興組合連合会（2017）『地域商店街活性化事業成果事例集（平成28年度版）』全国商店街振興組合連合会。商店街にぎわい PLAZA (<http://www.syoutengai.or.jp/>)（最終閲覧日：2017年8月11日）を参照。

文 献

- 熊谷哲大・後藤春彦 2011. 米軍基地周辺商店街の経営環境変化への対応方法と現状—横須賀市本町商店街を対象として—. 学術講演梗概集. F-1, 都市計画, 建築経済・住宅問題 2011 : 133-134.
- 佐藤洋一・周防泰臣・渡部真一・戸部幸一 1991. 米軍基地周辺商業集積地の現状—横田基地, 横須賀基地周辺を事例として—. 学術講演梗概集. F, 都市計画, 建築経済・住宅問題, 建築歴史・意匠 1991 : 457-458.

柴田誠規・鍛佳代子・樫原 徹 2005. 在日米軍施設周辺の商店街の研究—横須賀海軍施設とどぶ板通り商店街の変遷とその関連—. 学術講演梗概集. F-1, 都市計画, 建築経済・住宅問題 2005 : 499-500.

双木俊介 2016. 横須賀における米軍向け歓楽街の形成と変化. 歴史地理学野外研究 17 : 39-49.

松倉杏奈・山本清龍・ジョーンズトーマス, E. 2015. 米軍基地を抱える三沢市の地域イメージの把握を通じた観光まちづくりの提案. 日本観光研究学会全国大会学術論文集 30 : 85-88.

参考ウェブサイト

- コザゲート通り：沖縄市観光ポータルサイト (<http://kozaweb.jp/walk/gate.html>)（最終閲覧日：2016年12月19日）
- 福生ベースサイドストリートホームページ (<http://www.fussabasesidestreet.com/>)（最終閲覧日：2016年12月19日）
- 三沢市観光協会ホームページ (<http://kite-misawa.com/>)（最終閲覧日：2016年12月19日）